学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
２０１５年１２月５日
文責：ＪＵＮ

聴くことと話すこと

相手のことばをどのように聴くか，相手に対してどのように話すか，それは，学校教育だけの問題ではありません。人はみな，ことばがあふれる世界で生きています。ことばを使わない日々は考えられません。ことばをどう活用するかはどう生きるかだと言ってもよいでしょう。

聴くことは，「学びの共同体」の学校づくり・授業づくり（学び合う学び）において，学びの作法としてもっとも大切にされています。聴ける子ども，聴き合える学級にすることが協同的な学びの基本だと考えられているからです。それに対して，話すことはそれほど話題になっていません。というより，話すことを熱心に指導するのはよくないと受け取られているようにも思えます。でも，本当のところはどうなのでしょう。

聴くことと話すことは表裏の関係です。話すという行為がなければ聴くことはできません。聴くことが豊かになるとき，そこに確かな話し方が存在しています。子どもたちがこれから先ずっとことばを活用して生きていくために，教室における聴くことと話すことをともに育てていきたい，そう考える人は多いにちがいありません。

１　聴くことが学びを深める

人はみな，乳幼児のころ，周りの人の言葉を耳にすることによって言葉を獲得してきました。かかわってくれる人のすること・話すことの影響を受けて育ってきたのです。つまり人が人となる「学び」の出発は「聴くこと」だったと言ってよいでしょう。それは，その頃から，学びは，一人で努力するというより他者とのかかわりで実現していたことを示しています。「まなぶ」という語源が「まね（真似）ぶ」だということからしても推して知るべしです。

他者から受け取る，それは「受信」です。「受信」には「みること」「きくこと」，そして「感じること」などがあります。つまり人は自らの感覚を総動員して他者から学んでいるのです。ただ，人と人とのかかわりにおける主たるツールはことばですからことばによって学ぶことがもっとも多いと考えられます。そういう意味で「聴く」ことが学びにおいてもっとも大切なことだと言っているのです。もちろん「学び合う学び」における「聴く」は「みる」も「感じる」も含んでいると言ってよいでしょう。

聴くことによって学びが豊かになる，それは子どもにとってもっとも魅力的なことです。ずいぶんむかしのことになりますが，わたしに教室があった３０年前，「ごんぎつね」（新美南吉）の授業で一人の子どもが次のような感想を書きました。

（前半略）ごんは，うなぎをぬすんでしまって，兵十のおっかあに食べさせてあげられなかったと想像してしまったけど，ごんは，そういう気持ちがあるからこそ（石井註・こういう想像をするようなごんだからこそ），くりやまつたけを毎日毎日持っていってあげることができると思う。

ごんのふくざつな気持ち。その中に人を思う気持ちがあって，それがこのことでふくらんできた。そのことはとてもすごいと思う。

兵十を喜ばせてあげたい。それがごんの気持ち。だけど，ぼくは，初めその気持ちのほかにも何かあると思っていた。何かわからなかったけど。だけど，後でだんだんわかってきた。

ごんは，兵十と友だちになりたい。だけど，なれない。なのに，せめて兵十を喜ばせたい。それにつぐないもしたい。だけど，いたずらぎつねのままと思われている。いたずらぎつねのごんじゃないのに。ごんは，いたずらばかりしていたことをくやんでいるだろうな。ぼくは，ごんの気持ちがわかって，とてもかわいそうに思った。

ぼくは，初めの感想で，村の人と同じ気持ちになっていた。ごんはどんないたずらをするのかなとか，今までごんがやったいたずらは全部見つかっていないとか書いたからだ。村の人たちの気持ちもよくわかる。大事ないもやとんがらしをむしり取られたし，とても悪いきつねだったからだ。

でも，ぼくは，今，ごんの本当の気持ちがわかった。

この勉強でいちばん楽しかったのは，意見と意見がわかれたときです。そういうとき課題にするからです。苦労したことは，ごんの気持ちがふくざつだからです。だけど，そのふくざつな気持ちがだんだん（石井註・ぼくの頭の中で）一つになっていく勉強が大好きです。

この子どもは，自分が「ごんぎつね」の「ごん」のことをどのように感じるようになったかを書いているのですが，それとともに，いえそれ以上に，その感じ方が生まれるまでの学び方の魅力を述べていると言ってよいでしょう。彼が「意見と意見がわかれたとき」と書いているのは，互いの読みを聴き合っているときのことです。それを「わかれた」と書いているのは，子どもたちが互いの読みを比べたりつなげたりしているということを表しています。「課題にする」の「課題」とはその聴き合いの中から焦点化されたもののことです。子どもたちは「聴き比べ」「聴きつなげ」によって生じたものを曖昧にせず，学級全員で深めていったのです。課題にしてこうではないかああではないかと考えたからこそ，ごんの気持ちが「ふくざつで苦労した」と述べているのです。

複雑な課題，それは今の「学びの共同体」の授業で言えば，「ジャンプの課題」であり，意見が分かれたときの状態は「協同的な学び」「学び合い」だと考えてよいでしょう。この感想を書いた子どもは，授業において何度も発言を求めるような子どもではありませんでした。仲間の考えを聴いていることのほうが多いこの子どもが，「楽しかった」と書き，仲間との学び合いによって挑む複雑な学びが「大好き」だと言っているのです。それは，そこに「聴き合って考えることの魅力」が存在していたことを示しています。子どもは，簡単にわかってしまうことではなく，水面下に沈んでいる巨大な氷山を仲間と知恵を出し合って見つけ出すような学びに強い魅力を感じるものなのです。子どものこのような学びへの期待感は，３０年前も今も，そしてこれからも変わることはないでしょう。「学び」は「聴くこと・聴き合うこと」によって深くなるのです。

２　「聴く」とは作用が起きること

授業を参観していて首をかしげたくなることがあります。私語がなく，姿勢もよく，話をする人の方に顔を向けて整然と学習しているのだけれど，子どもたちが本当に聴いているようには見えないと感じるときです。

「聴く」という行為は，一人ひとりの頭の中に作用が起きることです。話し手から受け取ったことと自分の考えとの擦り合わせが起こったり，テキストや課題への戻しやつなぎが生まれたり，聴いたことに対して思考が活発になったりといった作用が起きることです。その作用の中から，ほんとにそうだという共感が生まれたり，自分にはない考えとの葛藤が生まれたり，そうではないのではないかという反論が生まれたりします。そのとき行われているのは，仲間との対話であり，テキスト・課題との対話であり，自分自身との対話です。それは，佐藤学先生のおっしゃっておられる「三位一体の学び」だと考えてよいでしょう。このような聴き方をすれば，何らかの気づき・発見が生まれます。そうなれば，聴くこと・考えることは面白いもの，楽しいもの，喜びや感動をもたらすものになります。それが，わたしの学級の子どもが感想に書いていたことなのではないでしょうか。

もちろん，聴いたときに発生する作用やそこから生まれる思考と感情は，子ども一人ひとりの頭の中で起こっていることです。つまりそれは脳内言語・脳内思考であり，教師が耳で聴くことのできるものではありません。そこに，聴くことの指導の難しさがあるのですが，その気になれば，そういう子どもの思考と感情の「しっぽ」のようなものはつかむことができます。それは，そういった作用が大きければ大きいほど頭の中だけで収まらず外面に出てくるからです。

どの子どもも心を開いて，学びへの期待いっぱいの視線で，耳の穴をいっぱいに開いて聴き合っている教室では，にっこりと微笑んだり，ふと考えこんだり，はっと驚いたように目を見開いたりといった多彩な表情が見られます。もちろん，ふっとつぶやきを漏らす子どももいます。それは，子どもたちの内部で聴いたことによる作用が起きている証だと言えます。教師は，そういう子どもの反応から，子どもの内部で生まれているものを察知することができます。察知すれば，子どもの考えにつながりをつくることができます。教師には，しっぽのような小さな反応から子どもの気づきを察知する想像力が必要なのです。

このように考えると，わたしたちが育てようとしている「聴く」は，反応の生まれる「聴く」でなければなりません。子どもと子どもがつながり合う「聴く」でなければなりません。だから，どんなに整然とどんなに姿勢よくしていても首をかしげざるを得ないということになるのです。

３　相手意識の希薄な話すこと

さて，この辺りで「話すこと」について考えてみることにしましょう。「聴くこと」とつながった「話すこと」の考察には，ここまで述べてきたような「聴くこと」が育ってきた学級ではどういう「話すこと」が生まれてくるのかと考えるのがよいのですが，その前に，「聴くこと」とつながっていないとどういう状態になるか考えてみたほうがよさそうです。

そういう学級では話すことだけ指導されているので，だれかが話してはいるけれど，多くの子どもがそれを聞いていないという状態になりがちです。さらに，そういうときの話し手のことばには，聴いてもらおう，このことを伝えようという意識・目的がなかったり弱かったりします。話してはいても自分の話に対する他の子どもの反応を期待していないと言ってよいでしょう。

ではなぜその子どもは話しているのでしょうか。それは先生から問題が出たから，または先生から指名を受けたからということなのでしょう。つまり，話している子どもは，仲間に自分の考えを伝え，仲間とともに考えていこうとして話しているわけではないのです。先生の指導に応えているのです。だから，仲間が聴いてくれているかどうかに関心はなく，先生に対して話すということになるのです。

子どものことばが仲間たちに向かないということはよくないと考える教師はかなりいます。そういう教師の中に「話すときはみんなのほうを向いて話しましょう」と言って，顔を他の子どものほうに向けて話すように指導している人がいます。けれども，話す子どもに仲間とともに考えていきたいという思いがなければ，「みんなのほうを向いて話す」という話し方は単なるポーズ，実質のない形だけのものになってしまいます。

聴くこととつながらない話し方はいろいろな弊害をもたらします。まず，子どものことばとことば，考えと考えがつながらないという状況をつくりだします。そうなると，子どもの学習は，互いの疑問や気づきをつなげて学びを生みだすものではなく，教師の求めるものを探し出すだけのものになります。そういう学習になればなるほど子どもたちは学ぶことの魅力を感じなくなるでしょう。

さらによくないのは，子どもと子どものつながりが弱くなるということです。子どもと子どもの直接的な対話が少ないのですから，学習時間における仲間の存在は極めて薄いものになることは必至です。この状態が進むと，孤立感を感じる子どもが何人も出ることになりかねません。

ことばは人と人とのつなげ，そのつながりによってよりよく生きようという思いももたらします。もちろんことばで相手を傷つけることもありますが，ことばのつながりは生きていくためにとても重要なものです。小・中学生の時代にことばに対してどういうイメージを抱くことができるか，人とつながることばを獲得できるか，ことばを大切にしようとする思いを宿すことができるかはとても大切なことです。わたしたち教師は，子どもたちのことばを相手意識のないものにしてしまってはならないのです。教師の質問に答えるだけのものにしてしまってはならないのです。子どもの発言量を増やしたいという一面的な考えが，子どものことばを相手意識の希薄な，話すことの意味や喜びを感じられないものにしてしまう，その危うさを教師は自覚しなければなりません。

４　聴くこととつながった話すこと

では，「聴くこと」を大切にし，聴き合う学びをつくりだしている学級における子どもたちの「話すこと」はどういうものになるのでしょうか。

聴き合える学級の子どもたちは，仲間の話に大きな関心を抱いています。聴くことでいろいろなことに気づけること，学びが深くなること，そして，聴いて考えて学ぶことの面白さを知っているからです。

そういう子どもたちが仲間に向かって自分の考えを話すのです。聴き方が育っている子ども，聴くことの魅力を知っている子どもが話すのですから，そこに自分の話を聴いてもらうのだという意識はかなり深いものになっているでしょう。もちろん，たとえ先生から出された質問に答える場合であっても，先生だけに向けた話し方にはなりません。つまり，教室にいる大勢の仲間たちのことを意識した話し方になるのです。それは，どんな場合でも，仲間とともに学んでいるという思いがあるからでしょう。聴き合う学びを毎日のように経験している子どもたちは，だれに対して話すの

かという相手意識を当たり前のように有するようになります。

そうなると，どう話せば，みんなに伝わるのだろうかと考えるようにもなります。この伝えたいという意識が，話し方を磨きたいという思いを生みだすのです。

ある学級の算数の授業を参観したときのことです。授業の中ほどで，一人の子どもが書画カメラによって映し出したノートを指しながら，自分の考えを説明しました。わたしは，その子どもの説明ぶりにつくづく感心してしまいました。そのとき，その子どもが発したことばは教師にではなく仲間である他の子どもたちに対してはっきりと向けられていたからです。

彼は，少し説明しては，「ここまで，いい？」「ここまでわかった？」と仲間に語りかけているのです。この子どもは，一つひとつ丁寧に確実に仲間に自分の考えを伝えようとしていたのです。そのため一気に話すのではなく，みんなの反応を求め，その反応に応じて説明を続けたのです。

また，別の学級でこんなシーンを目にしました。その子どもは，授業時間の終わり近くになるまで全く語ろうとはしませんでした。しかし，周りの仲間が語るのを，体を乗り出すようにして聴くすがたにはなんとも言えない存在感がありました。ただ聴いているだけではなく，聴きながらふっとテキストに目をやり考え込むのです。彼女が聴きながら深い思考をしているのは疑いようのないことでした。その子どもが，残り時間 10 分を切ったとき口を開いたのです。勢い込んだ話し方ではありませんでした。考え考え語りだしたのです。けれども，語った内容はそこまでの学びの曖昧さから切りぬけるポイントを提起するものでした。まさに聴いていたからこそ生まれた発言です。それは，聴き合う学級ではこんなにも魅力的な語りが生まれるのだという感慨をもたらすものでした。

聴くことが大切にされている学級の子どもは，どの子どもも，どこかで話そうとします。みんなが聴いてくれるという安心感，信頼感があるからです。そんなにして聴いてくれるみんなにしっかり伝えたいという思いが湧くからでしょう，話し方も魅力的です。ことばに目的があり，思いが宿り，話して返ってくるものへの期待感があるからでしょう。

もちろん，そうなるには，どう聴くかという指導とともに，どう話すかという指導もあったにちがいありません。聴く指導をすれば自然に話し方がよくなると言えるほど「話すこと」は安易なものではないからです。けれども，その「どう話すか」ということも，聴いてもらえる，話せばつながりが生まれる，話すことで学びが生まれるという期待感・たのしみがなければ子どもの中に根づいてはいかないのです。

このように考えると，「話すこと」は「聴くこと」と切り離して考えてはならないということになるのではないでしょうか。両者は，伴いながら質が上がって行くものなのです。聴いてもらえるから話すのだし，話してくれるから聴くのですから。ただ，わたしが行ってきた感じから言えば，どちらかと言うと，「聴くこと」を先行させるほうがよいのではないでしょうか。人が人になっていく基本は「聴くこと」であり，それが学びの基本であるし，聴き手に届けるために話すのだということからもそう考えられます。

５　聴き方・話し方を磨く

「学び合う学び」の深まりを目指すとき，教師は，子どもたちの聴き方・話し方の質が上げていきたいと思うものです。それは当然のことでしょう。けれども，聴き方・話し方は，やり方・方法を教えることで高めることはできません。

作文をある形式に当てはめて書かせる人がいますが，それが事務的な文章ならそれでもよいでしょうが，それでは子どもの文章の味は生まれてこないことになります。聴き方・話し方も同じことです。画一的な指導では，書くことも聴くことも話すことも味わい深いものにはならないのです。

けれども，それは，子どもの好きなように書かせていればよい，好きなように話させればよいということではありません。それでは，書き方・聴き方・話し方に対する子どもの学びが生まれません。子どもが学んでよりよいものを目指すということはなくてはならないことです。それには，どうすればよいのでしょうか。

それは，大切にしなければならない基本的なことをしっかりと示すことだと考えます。たとえば，話すときに聴いている人を見る，何人もいればその何人もに視線を移すようにして見る，そして，聴いている人の様子からその人たちの反応が受け取れるように心がけるといったことです。よく聴いてもらうには話すときに間をとるようにするということも教えたほうがよいのですが，それも聴く人との対応関係が生まれてくれば自然とできるようになります。わかりやすい話し方には順序性があること，ことばの使い方がよいこと，強弱があることなど大切なことがありますが，それは，話をする前に指導するというより，だれかの話を事例にして学ぶようにしたほうがよいでしょう。やり方を指導するより，話してみたことの事例で学ばせるのがいちばん確かなのです。

ところで，聴き方については，話をする人の顔を見て聴くとかがありますが，前述したように，どう聴いているかは内面的なものなので，外見的なことをいくら指導してもだめなのです。子どもが心を開いて，耳を澄ませて聴こうとするようになる，実は，その鍵を握っているのは教師の対応なのです。

わたしは，子どものことばを温かく丁寧に聴く教師のいる教室では，子どもたちの聴き方も同じようなものになると思っています。そのように聴いてもらった心地よさが，子どもたちの聴き方をそのようにしていくからです。

教えることを急がず，子どもの気づきや考えをつなぐよう心がけている教師の教室では，子どもたちもつなげよう，聴いて何かを見つけようとするようになります。つまり，そういう聴き方が育つということです。

子どもと子どものあいだに対話が成立するということは子どもと子どものことばのあいだに教師のことばがないということです。子どもの探究はスムーズに行われることはまずありません。こうではないかああではないかとさまざまに考え，その考えを対話によって擦り合わせ，つなぎ合わせながら道を探し出して進んでいくのです。このときの学びは子ども同士の「対話」によって行われるという認識を教師はもたなければなりません。いちいち口をはさんだり，無理にわからせようとしたりしては子どもがそれをできなくなります。饒舌な教師の教室では子どもの聴き方は育ちません。

つまり，「話すこと」も「聴くこと」も，子どもとともに教師も自らの「話すこと」「聴くこと」を磨くように心がけなければならないのです。そのようにしている教室には，子どもと子ども，子どもと教師の「対話」が存在しています。他者を尊重し，他者から学び，他者を支え，他者とともに育とうとする「対話」が存在しています。

ことばを磨くことは子どもたちの未来につながります。その未来につながることばを，教師と子どもが一つになってはぐくんでいきたいものです。